

聖書：マルコの福音書 4：35～41

説教題：どうして怖がるのですか

日時：2025 年 8 月 3 日（朝拝）

今日の箇所イエス様と弟子たちが乗った舟は突然の嵐に遭遇します。激しい突風が起こって波が舟の中にまで入り、舟は水で一杯になります。まさに死と背中合わせの状態です。弟子たちはたまらずイエス様に言います。「先生。私たちが死んでも、かまわないのですか。」私たちも様々な人生の嵐に出会うことがあるかもしれません。仕事の問題や経済的な問題、また健康の問題や人間関係の問題、また家族や愛する人の死という問題。そういう中であえぐ時、私たちも弟子たちのような気持ちを持つかもしれません。「主よ、私がこのような状況にあってもあなたは何とも思われないのですか？」「私を気にかけておられないのですか？」「あなたは私の状況を見ておられないのですか？」「あなたは私を愛しておられないのですか？」と。しかし弟子たちの叫びに対するイエス様の答えは「どうして怖がるのですか」というものでした。つまり人間の側の信仰に問題があるということです。私たちは自らが人生の嵐に遭遇した時、どういう信仰に立てば良いのでしょうか。その問いのもとに今日の箇所にもう一度目を留めて行きたいと思います。

まず一つ目に弟子たちはなぜこの嵐に直面したのでしょうか。35 節に「さてその日、夕方になって、イエスは弟子たちに『向こう岸へ渡ろう』と言われた」とあります。船で向こう岸へ行こうと言われたのはイエス様でした。弟子たちはそのイエス様に従っただけです。その結果、嵐に出会いました。もし彼らがイエス様に従わなかったため、たとえばイエス様がここにとどまろうと言ったのに、「いや、向こう岸へ行きましょう」と言って舟を出したのであれば、嵐に会ったのは彼らの不従順のためと言うことができます。しかし彼らはイエス様の命令に従いました。その結果、こうなったのです。ここからイエス様に従う生活をしているのに人生の嵐に会うことはあるということ学びます。ともすると私たちは神に従っていれば祝福があり、そうでない時に困難が起こると考えがちかもしれません。そのため、生活がうまく行かないと何か自分が悪いことをしたからだろうか、神に良く思われていないしではないかななどと考えてしまいます。また他の人をもそのような目で見やすいかもしれません。うまく行っているあの人は神との関係が良好なのだろう。一方うまく行っていないあの人には何か隠れた問題があるのかもしれない、などと。確かにそういうケースもあるかも

しません。しかし常にそうなのではないということを私たちはここに見るのです。弟子たちは 36 節でイエス様に従いました。そのために嵐に出会ったのです。なぜそうなのでしょう。結論から先に言えば、それは私たちの信仰をテストするため、そのテストを通して私たちを訓練するため、そして私たちの信仰を成長させるためです。

私たちの状態は試されることによって明らかにされます。テストとはそういうものです。どこまで学んだか、それによってチェックされます。私たちは順風の日には自分は信仰によって歩んでいると思っているかもしれません。多少の困難がやって来ても私は十分に対処できるとひそかな自信さえ持っています。しかしいざ嵐の中に投げ込まれると試されるのです。これまで学んだことは本当に身につけているのかと。ここでの弟子たちもそうでした。彼らはイエス様から「まだ信仰がないのですか」と言われました。今や十分にこの困難に対処できて良いはずなのに、そのレベルに達していないことが暴露されました。「まだそこまで行っていないのですか？」と。

しかしこのテストはただその人の状態を明らかにするだけでなく、その人を訓練し、大切な学びを得させて、一層の祝福へ導くためのものでもあります。弟子たちは最後の 41 節で非常に恐れて互いにこう言いました。「風や湖までが言うことを聞くとは、いったいこの方はどなたなのだろうか。」 彼らはこうしてイエス様についての新しい理解を持つに至ったのです。自分たちが思っていた以上の恐るべき方であることに目が開かれて行ったのです。ちなみにこの箇所には「非常に大きい」という意味のギリシャ語の「メガス」という言葉が 3 回出て来ます。メガチャーチの「メガ」と同じです。一つ目は 37 節の「激しい突風」という部分の「激しい」という言葉です。この非常に大きさに彼らは動揺させられました。二つ目は 39 節の「すっかり風になった」というところの「すっかり」と訳されている部分です。直訳すれば非常に大きな静けさがあったということです。場面は非常に大きな風から非常に静けさへと変わりました。この静けさの異常な大きさが強調されています。そして三つ目は 41 節の「非常に恐れて」という部分です。つまり大きな嵐は静まりましたが、弟子たちの心には大きな恐れがむしろ生じたのです。外の嵐は収まったのと対照的に彼らの心の中に嵐が生じたのです。このイエス様とは一体どなたなのだろう！という恐れは嵐です。彼らはこうしてイエス様に対する新しい理解、新しい洞察へと導かれました。これは彼らの祝福につながることです。私たちが経験する様々な嵐も同様です。それは私たちを試すためのものであると同時に私たちに大事な学びを得させるためのものです。主に

ついて新たな発見をし、主の栄光を見るようになるための特別な機会なのです。

試練の中で立つべき信仰について二つ目にここから学ぶことは、弟子たちとは対照的なイエス様の姿です。弟子たちは嵐の中で慌てふためきましたが、イエス様はそうではありませんでした。そのイエス様に注目することによって大切なことを学ぶことができます。まず私たちがここに読むのはイエス様がこの嵐の中で「船尾で枕をして眠っておられた」とあることです。これは一体どういうことでしょうか。これはまずイエス様の人間性を示すものと言えます。イエス様はこれまで多くの群衆を相手に神の国を宣べ伝え、また病人や悪霊につかれた人を癒やす働きをして来ました。休む間もないほどであったことが3章20節に記されていました。そのため、舟に乗った後、イエス様は眠ってしまわれたのです。それだけ疲れを覚えておられたということでしょう。と同時にここには父なる神への信頼も表されていると言えます。聖書で眠りは神への信頼と結び付いています。詩篇3篇5～6節：「私は身を横たえて眠り、また目を覚ます。主が私を支えてくださるから。私は幾万の民をも恐れない。彼らが私を取り囲もうとも。」4篇8節：「平安のうちに私は身を横たえ、すぐ眠りにつきます。主よ、ただあなただけが安らかに私を住まわせてくださいます。」マタイの福音書6章25節でイエス様は「何を食べようか何を飲もうかと、自分のいのちのことで心配したり、何を着ようかと、自分のからだのことで心配したりするのはやめなさい。いのちは食べ物以上のもの、からだは着る物以上のものではありませんか」と言われました。イエス様はそこで、いのちと体を与えた神は、その人の人生における神のご計画がゴールに達するまで必ず必要なものを備え、導いてくださると言われました。そのような天の父に信頼している姿がここに 있습니다。神の目的が達成されるまで私たちの人生が突然終わりになることはないのです。そのことを信じ切って平安の内に嵐の中でも眠っているイエス様の姿があります。

そのイエス様は弟子たちに起こされた後、彼らにこう言われました。「どうして怖がるのですか。」つまり怖がる必要はないということです。なぜでしょう。今述べたことからすれば、すべては神の御手の内にあります。その神に信頼するなら恐れる必要はないということかもしれません。それとともにここにはもう一つの方向もあると思われまます。すなわちイエス様に対する信仰です。イエス様は「まだ信仰がないのですか」と言われました。「まだ」とあるのは、本来ならもう十分にこの状況に対処する信仰を持っていってもおかしくないのにという意味が含まれていると思われまます。弟子た

ちはこれまでイエス様とともに生活して十分な学びをして来ました。イエス様が悪霊を追い出したり、病を癒やしたり、ツァラアトの人をきよめたり、中風や足の萎えた人を直すなど、多くのみわざを行って来たことを彼らはそばで直接見て来ました。その彼らなら当然この状況でイエス様への信仰に立っていてもおかしくなかった。なのに、まだ信仰がないのですかとイエス様は問うています。イエス様はこう述べて、この嵐の中でも信仰によるなら、これに対処し、乗り越えて行くことができると仰っています。その信仰の歩みへと招いておられるのです。

では三つ目に様々な人生の嵐の中でしっかり立つために、この箇所が特に教えているメッセージは何でしょうか。それは一言で言うならイエス様は大自然の上にも権威を持ちたもう私たちの救い主であるということです。イエス様は起き上がって風を叱りつけ、湖に「黙れ、静まれ」と言われました。すると、突風はピタッと止まり、非常に大きな嵐となりました。考えられないようなことが起こりました。これは何を意味するのでしょうか。それはイエス様は神であられるということです。詩篇 89 篇 8～9 節：「万軍の神主よ。だれがあなたのように力があるでしょう。主よ。あなたの真実はあなたを取り囲んでいます。あなたは海の高まりを治めておられます。波が逆巻くときあなたはそれを鎮められます。」 詩篇 107 篇 29 節：「主が嵐を鎮められると波は穏やかになった。」 この造られた世界が、ある声に全く服従するのは、その方がこの世界の上におられる方であり、この世界の創造者なる神であられるからです。その偉大な神が人としての姿を持ってここにおられました。イエス様がこのような驚くべき権威を持つ方であることは、この後の記事で連続して記されます。次回は多くの悪霊、レギオンの上にも権威を持つ方であることが語られ、その後は長血の女の癒やしを通して不治の病の上にも権威を持つ方、さらにはヤイロの娘を生き返らせることによって死の上にも権威を持つ方であることが示されて行きます。

しかしこれは単にイエス様の神性を証しするだけのものではありません。イエス様はどうしてその力を弟子たちの救いのために発揮されるのでしょうか。神は罪人をただで救うことはできないのではないのでしょうか。つまりここに示されているのは贖い主としての力と言えます。イエス様はやがて私たちの代わりに十字架につき、ご自身が代価を払って、より頼む者たちを救い出してください。そのような救い主としてイエス様はこの力を発揮しておられるのです。別な言い方をすれば救い主がもたらす神の国の祝福がここにも描き出されているのです。

先ほど、このあと5章の終わりにかけてイエス様が様々な力の上に権威を持つことが記されると述べましたが、これら一連の話に見られる災いはすべて罪ゆえにこの世に生じたものです。今日の箇所では大自然が人間に牙を向けましたが、本来このようなことは罪が入る前にはなかったことでした。罪のために人間と世界の間にも不調和が生じ、様々な自然災害が生じるようになりました。また次回見る悪霊の働きもそうです。その次に見る不治の病や死もそうです。これらの記事に登場する人々は、これらの災いのため、みな絶望に陥っています。もう終わりだ！と嘆いています。しかしそこへイエス様が来られて、「いや、それは終わりではない」ということを示して行かれます。私たち人間をこの世で圧倒するこれら様々な力に対して、イエス様はさらに勝る力を持ちたもう救い主であることが示されて行くのです。そのことを表す一連の記事の最初が今日の箇所なのです。ここにまず大自然の力に勝る権威を持ちたもうイエス様であることが記されているのです。

今日の記事はこの真理を見える仕方で表す一種のデモンストレーションと言えます。ですから私たちの個々のケースにおいて必ず地上的災害から救われることまでは保証していません。クリスチャンが乗った舟は決して沈まないとか、飛行機は落ちないとか、信仰者の病は必ず癒やされるとまでは言えない。もしそうだったら私たちはいつまで経っても死ねないということにもなってしまいます。その結果、いつまでも天国に行けないということにもなってしまいます。そうではありません。私たちにとって一番幸いなのは、神がご計画された一番良い時まで地上の生涯を全うし、一番良い時に天の故郷へと迎え入れられることです。その最善の時が来るまでイエス様は私たちの救い主としての力強い愛の御手をもって私たちを守り続けてくださる。どんな力も、大自然の力も、主の御手から私たちを奪い取ることはできないのです。ですから私たちはどんな嵐の中に投げ入れられても怖がることから解放されています。むしろ私たちの主を信じ、お委ねして、平安の内に歩むことができるのです。

私たちは自分の人生の嵐の日に今日の箇所を思い起こして導きを得たいと思います。主は必ず私たち一人一人をこのような中へと導かれます。それは私たちの信仰をテストするため、またそれによって私たちをさらなる祝福へと導くためです。今そのただ中にあると感じている方々もいらっしゃるかもしれません。そんな中、私たちが立つべき信仰は、イエス様は大自然の力にもはるかに勝る圧倒的な力を持って私たち

とともにいてくださるということです。主は一言で風と波を静めることができるお方です。私たちがどんなに揺さぶられるような中に置かれても、このイエス様がともにいてくださいます。もし私たちがその状況で怖がっていたならイエス様は言われるでしょう。「どうして怖がるのですか？まだ信仰がないのですか？」と。私たちは怖がらなくて良いのです。主は決して私に無関心なのではなく、十字架の愛をもって今日も導いてくださっています。その主への信頼によって私たちは嵐の中でもぐっすり眠ることができるのですし、また起きて自分のなすべきことに集中して取り組むことができます。主はその絶対的な守りの御手の中で私たちに必要な学びと祝福を与えて、今の困難の先にある大きな嵐の状態へと導いてくださいます。この主に信頼の目を上げ、嵐の経験を通して主の栄光を見る者とさせていただき、主が備えてくださっている最善の地へと導かれる幸いな者たちでありたいと願います。